
魔法少女リリカルなのは～孤高の黒き剣士～

眈篋夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 孤高の黒き剣士

【Nコード】

N9474Z

【作者名】

毗篋夢

【あらすじ】

主人公は何の変わりもない只の高校生。そんな主人公はある日買い物に出かけ、その帰り道にひょんなことで死んでしまう。目が覚めたら……。これはよくあるとある転生の物語り、神様から貰った力で原作ブレイクをしていく。

No:01 終わりと始まり（前書き）

作者の初めての投稿で何かと至らぬところが多々あると思います
が、よろしく願います！！

楽しくやっていけたら良いと思います。

No:01 終わりと始まり

えっと・・・とりあえず目の前で
何が起こっているのかを整理しよう。

「で、あんた誰？」

・・

そこは真っ白な空間で土下座をしている少女がいた。

おいそこっ！警察に電話すんな！！

「で、ここ何処？そんなもって、アンタ誰？」

「ごめんなさい、実は姉神様の机でモン○ン3rdでイビ○ジョー
を狩っていたら

気づいたら眠っていて、その・・・」

「・・・で？（もしかして・・・）」

「あたしのヨ○レで汚してしまつて、破けちゃいました。テヘッ」

「・・・やっちゃっていいよね？（怒）」

「ごめんなさー！ーいっ！ー！」

どうやら俺はこの少女のせいで死んだらしい。

「えっと、、マジかよ（汗）」

~~~~お亡くなりになる前~~~~

「たつたく暇だよなー」

俺は余りにも暇だったので新作のゲームのチェックをしに、

店へと足を運んでいた。「友達と遊べば？」とか言う奴は許さん！！

「なんか面白そうなゲームあるかなー？」

店の中で約1時間ほど商品を見回していたが、

特に気にいるものが見当たらなかったのでとりあえず

帰宅をすることにした。

帰宅途中喉が渴いたので飲み物を買い、公演のベンチで休んでいるところ

目の前でサッカーをして遊んでいた子供達の

サッカーボールが道路へとびだし、トラックが来ているのに気づかずその中の一人の少年はつられるように道路に飛び出した・・・

「へ？」

「ッ！あのガキッ！！」

~~~~~

そっか・・・俺

あの子供をかばってトラックにひかれて・・・

死んだのか。

「ねえ、そろそろいい？」

「ん？ああいいぞ」

（何か俺を殺しやがった少女が何かいつてきてらあ）

「アンタ今凄く失礼なこと考えたでしょ（ジトツ）」

「いや・・・別に・・・ソナナコトナイヨ（汗）」

「まあいいわそんなこと」

（じゃあ言っなよ）

「早速だけど、アンタを転生させるわ」

「ん、転生ってあれか？あのもう一度人生を楽しめる的な」
「そうそうそれぞれ」

うわー。まさしくあれだな。うん。

小説やゲームだな。・・・テンプレキタ

(。 。)

!!

「・・・話を戻すわよ」

「お、おう、」

「早速だけどあんたには「リリカルなんちら」って世界に逝ってもらうわ」

「ふゝゝん。・・・ちよつと待て、行かす世界の名前知らねえのかよ！

てか、行かすのとこ漢字違くなかったか!!」

「あーうるさい。転生できるだけ有難く想いなさいよ」

(・・・あれ、コイツ最初とキャラ違くないか?)

「あー。有難う」

「べ、別にアンタのためじゃないんだからね!!」

(ここでツンデレかよーー

・・・有りだな(-、 -、)キリッ)

「そんで、何か能力とかってもらえたりすんの？」

「え？ああーうん。できるわよ、何か要望とかあるわけ？」

要望？そんなの有るに決まっているだろが!!

「とりあえず・・・魔力・気力のランクEX。武道の心得。十二の

試練。

アニメや漫画の全能力使用可能・・・まあこんなもんで」

「・・・結構あるわね。全能力使用とかは多分・・・てか、絶対に制限とかあるからね。それと、容姿とかは？」

「まあ制限あるだろうな。容姿ねえ・・・主人公たちと同じ年で、見た目普通で、

髪は黒、目は緑で、身長は高め、体は細めでよろしく！」

「・・・こ、細かいわね」

「まあなあー面白そおじゃん？」

「ハア・・・まあいいわじゃあ送るわね」

「あいよー」

ここから俺の新しい人生が始まるのか・・・

「あ、言い忘れていたけど、生活とかは自分でしてねー」

「えっ！（。。。１１１）」

「バイバーーーーイ」

「待てこら幼女・・・・・・・・・・」

「・・・さーてイビ○ジョーの太刀作るぞー」

って！デバイス渡すの忘れた・・・・・・・・まあいつか」

No:01 終わりと始まり（後書き）

次回は主人公のプロピールを紹介させていただきます。

設定（キャラ紹介等）（前書き）

全く人気が無い作品ですが、よろしくです。

設定（キャラ紹介等）

主人公（オリキャラ？・登場人物）紹介

名前：冷氷 無月（れいひょう むげつ）

身長：134センチ

体重：34キロ

性格：あまり人を好まないが、困っている人には手を貸す。

能力：チート（多過ぎる）

魔法・気力：ランクEX

・剣が好きで近接戦闘を好む。

無月「・・・出鱈目だな」

作者「すまん、あんまりアニメとか知らないから知っている分フル活用させるには

これしかなかったのだ」

無月「・・・お前貧乏だもんな」

作者「おい、その痛々しいような人を見る目はなんだ？」

無月「いや、かわいそ・・・なんでもない」

作者「お前今明らかに「かわいそうだから」とかって言っつもりだつただろ！！」

無月「・・・フウ」

作者「溜息をつくなー！ー！！」

無月「で、こんな会話でいいのかよ」

作者「いや、実はお前と敵対する奴も追加する」

無月「敵対？斬っていいのか？」

作者「それは、今後の展開次第だな・・・まあ殺させはせんよ（笑）
では、モブキャラの御紹介〜」

無月「・・・（コイツ遊んでやがる）」

名前：高町 秀哉 （たかまち しゅうや）

身長：131センチ

体重：31キロ

性格：女に目が無い（特に美少女）。自意識過剰。自己中心。

能力：特になし

魔法：ランクSSS （気力は神に頼まなかったため常人以下。）

・魔力Ⅱ強さだと考えており、見た目と魔力量だけは良い。

無月「・・・」

作者「・・・」

無月「コイツさ、ランクSSSまでしか絶対知らなかっただろ」

作者「全くもって同感だ」

無月「しかもゝ能力：特になしって・・・ただのバカだろ」

作者「まあいいだろ。つってもどうしよっかなー」

無月「何がだ？」

作者「いや、俺ってさ原作知らないじゃん。どうやって物語を進めようかと・・・」

無月「・・・よくそなので小説書こうと思ったな」

作者「いやー。楽しそうじゃね？」

無月「・・・こいつもバカか」

作者「なっ！作者にむk」

秀哉「いやー諸君、御機嫌よう。この小説の主人公の高町秀哉様だ！！

ハッハッハー！ー！！」

無月・作者「・・・（うわぁー・・・）」

秀哉「どうしたんだい？愚民ども」

無月「チッ・・・おい作者、俺の武器はどうやって出すんだ？」

作者「ん？ああ。お前の影に出したい物を頭に浮かべながら手を突っ込んで

「来い」って出したい物の名前を言えば出せるよ」

無月「そうか・・・来い・・・斬月!!」

グワッ!!

秀哉「な、なんだその馬鹿デカイ刀は!」

無月「こいつは斬魄刀っていうんだよ。いくぜ。卍解天鎖斬月。
ぶっ飛べ・・・月牙天衝!」

秀哉「え、ちよっ・・・う、うわああああー!!!!!!」
ドッカーン

無月「・・・(やっぱ刀はいいなノノノ)」

作者「・・・(さすがモブキャラ。扱いが・・・)」

無月「それでは、この小説を読んで下さっている読者様、続きはまた今度で」

作者「え!それは俺のセリフー!!!!!!」

無月「早い者勝ちだよ。毗籠夢さん」

作者「んー。ならしょうがないな。では、また今度」

設定（キャラ紹介等）（後書き）

次回から本編に突入します。

原作を知らないので、原作崩壊引き起こしていきましょう！

転入生（前書き）

どーもー。全く読まない小説の書き人眦篋夢です。
今回はタイトル通り、無月の転入日です。

転入生

無月side

(着いたか・・・)

そこは一室の部屋だった。

「まずは自分の能力をh」「ハローッ」・・・」

「実はねえ実はh」「どうせデバイスのことだろ？渡されていてねえし」
「・・・」

「むう~~~~まあいいけど。はい、これデバイス名前はアルフィンでユニゾンデバイスだからね」

「・・・ああ」

「あなたが私のマスターですね。私の名前はアルフィンです」

「あー。マスターじゃなくて無月。俺の名前は冷氷 無月だ」

「了解しました。マスター無月」

「・・・無月だけで呼べよ」

「それじゃ私帰るねーばいばい」

「あーはいはいばいばい神様(幼女)」

「……ナニカイツタカシラ？」

「……何も言っていないです（汗）」

「さて、アルフィン学校に行くか」

「はい」

なのはside

今日は学校に来た時からいつもより少し賑やかだった。

「すずか、アリサおはよー」

「おはようなのは」

「おはよー」

「ねえ今日ってみんな騒いでいるけど何かあるの？」

「転入生だってよこの学年に二人も」

「男の子かなー？女の子かなー？」

ガラガラガラ

「はい。みんな静かにー……よし。」

今日はこのクラスに男の子の転入生がやってきます」

生徒A「先生質問です!。その人はカツコイイですか?」

「うーん。かつこいいんじゃないかしら」

全員「おーーう」

「じゃあ無月君入ってきて」

コツコツコツコツ

「今日隣町から引越してきた冷氷 無月です。質問等は一切受け付けません

人付き合いは苦手なのであまり関わらないでくださいよろしくお願いします」

生徒B「おお、これは・・・//」

生徒C「なんか、Cool!!」

「では、無月君の席は・・・高町さんの隣ね。
分からないことがあれば、高町さんに聞いてね」

「分かりました」

「わ、私なのは、高町 なのはって言います」

「・・・ああ、よろしく」

(こいつ俺の今の自己紹介聞いてなかったのか?)

なのはside

（無月君こんなに露骨に嫌わなくてもいいのに）

・席について早々なのはから遠ざかる。

・なのはのことを無視（寝ている）。

・起こそうとしたら「うるさい」って言われるし。

（……はぁ（落ち込み中））

無月side

（なんなんだよこの魔王。俺の自己紹介マジで聞いていなかったのか？

滅茶苦茶つかかってくるじゃねえかよ……ハア」

「無月君……無月君……」

（うるせえ……先生さんこいつをなんとかしてくれ……」

「ん？高町何を話している」

「ふえっ！いいえ、何でもありません」

「そうか……だったら金、銀、銅、水銀の化学式を答えろ（ニヤニヤ）」

「えっ！えつと……」

「……（カキカキカキ）」

スッ・・・

「え、無月君これを言えればいいの？」

コクッ

「どうした高町答えられないのか？」

「えっと・・・金 \equiv Au、銀 \equiv Ag、銅 \equiv Cu、水銀Hgです」

「！！・・・いいだろう、座ってください」

「無月君、有難う！」

「有難うと思うなら、俺に関わらないでくれ」

「え・・・ごめんね」

「スースー（なんか高町の髪が垂れ下がった気がするぞ）」

（けど・・・私負けない！！）

理科の授業中でした。

転入生（後書き）

無月「・・・なあ作者」

作者「どうした？」

無月「あの高町とかいう奴を俺に近づけるな！そのせいでオチオチ眠れやしね

え！！」

作者「あーそれは無理」

無月「なぜ！？」

作者「だってさ、一応原作キャラの女性ほとんどお前にくつつけるし」

無月「・・・・・・・・・・は？」

作者「ってことでまた今度」

無月「おいテメエーーーー！！！」

アリサの怒りと敗北（前書き）

無月「・・・なあ作者」

作者「ん？」

無月「このタイトル不味くね？」

作者「まあタイトルだけだし気にしないでいいんじゃない？」

アリサの怒りと敗北

無月side

（畜生、なんなんだよあの高町とアリサっていうやつ（イライラ）

~~~~~回想~~~~~

4時間目が終わり、人々はみな、思い思いに御弁当を広げるのであった。

「なのはー御弁当どこで食べる？」

「教室？それとも屋上？」

「私は屋上まで行くの疲れるから教室がいいな」

（魔王と友達かける×2か・・・こいつらは教室で食べるらしいからな・・・

俺は屋上で食べるか」

ガタッ コツコツコツコツ・・・

なのはside

「・・・・・・・・・・はあ」

「どうしたの？なのは」

「いや、何でもないんだけどね・・・」

「無月君の事？」

「うん・・・理科の時間に助けてもらったから有難うっていったんだけど・・・」

「だけど？」

「「有難うって思っただったら俺に関わるな」って言われて」

「はあああ！！何あいつサツィテーーーー！！！！」

「ちょっとアリサ。そんなに怒らないでよ」

「いや、私あいつぶっ飛ばしてくる」

ガタッ！ タッタッタッーー

「あ！アリサ！！」

「すずか追おう！」

「うん！」

~~~~~回想終了~~~~~

無月side

ここは屋上の端の方のベンチ

一人の少年が弁当を食べていた。

（ふうー。ようやく一人になれた。今日は帰ったら能力テストだな）

そう思つて、食べ終わった弁当をかたずけていると。

バンッ！！

勢い良く屋上のドアが開かれた。

「あんたがなのはに酷いことをっ！！」

アリサは無月に殴りかかった……が、

「え？」

そこに無月は居なく、いつの間にかアリサは宙をまい地面に落ちた。

ドンッ！！

「うつ……」

「なんだ……誰かと思えばバニ……女か」

「くっ、バニングスだ！！（全く見えなかった!?）」

「はぁ……面倒だな……（これが武道の心得か……）」

「「アリサッ!」!」

アリサ s i d e

（なんなんだよコイツ。殴りかかったときには目の前に居たのに気づいたら

私が地面に叩きつけられて、あいつは私の後ろにいた）

「はぁ・・・面倒だな・・・」

（コイツッ!）

「「アリサッ!」!」

「なのは!すずか!どうして二人がここに!」?

「どうしてってアリサが無月君のところに走り出したから」

「コイツは・・・私がやる!」!

無月side

「コイツは・・・私がやる!!」

（はぁ・・・やべえ・・・斬りたくなってきた・・・これ以上は無理だな）

「お前たち。俺は自己紹介のとき言ったよな、関わるなって・・・」

「だったらなによ!」

「ちよつとアリス!」

「はぁ・・・まあいいや。・・・興ざめだな」

コツコツコツコツ

「!ちよつと、逃げるの!??」

「俺に一撃でも入れられなかったやつがよく言つぜ」

「くっ・・・」

「じゃあな」

「待って!!」

なのはside

「だったらどうしたら私たちとお話してくれるの？」

「ちょっとなのは！こんな奴ほっとけばいいのに！！」

「・・・だったら、魔法でも使って俺を負かしてみな」

コツコツコツコツ

（魔法！？そんなの・・・）

無月side

俺は正直うんざりしていた、

高町は俯き、バニングスは睨み、月村はチラチラ窺っていた。

そして下校時間

（さてと、さっさと戻って能力テストだ！！）

そして、無月が自宅で能力テストをしている頃、

なのは小さな宝石を携えたフェレットと出会っていた。

なのはがフェレットと出会い、

そして

この物語は

動き出す。

変態登場！？（前書き）

作者「なあ無月」

無月「・・・なんだ」

作者「安心しろよ。前話の後書きにも書いたが、

ちゃんとアリサとのフラグ立てるからな（キラキラ）」

無月「・・・ナッツ、カンビオ・フォルマ

ダブルイクスパーナ
XXBURNER!!」

作者「えっ!!」

変態登場！？

無月side

「なあアルフエン」

「なんですか無月」

「俺の能力ってさ、お本当にチートだな」

「そう……ですね」

俺たちは今、近くの林に結界を張って
その中で能力テストをしている。

「やっぱボンゴレはいいよなー」

「無月？」

「いや、何でも無い」

今俺が使っている武器は……

（大空のリングVer・X……これは凄まじい炎だな……）

「ガウッ」

「ナッツ、カンビオ・フォルマ モード・アタック

ミテ・ナ・ディ・ボンゴレ・プリーモ」

「ガウッ！」

「え、ええええー！！猫ちゃんがガントレットに！？」

「あー、まあこういうものだから気にするなアルフィン」

なのはside

「これが……魔法」

「そうだよ、そして君には魔法使いの才能がある。
僕のために力を貸して欲しい」

そしてここでは、未来の魔導士エース

高町　なのはとそのデバイスレイジングハートが揃った。

無月side

（ふむ、何事かと思えば、高町が魔法使いに目覚めたか・・・）

「無月さん、取り敢えず道路とかを元に戻したほうがいいかと・・・」

「そう・・・だな。来い、タイム風呂敷　！！！！」

「・・・それはドラエム（それ以上は言うてはいけない！！）・・・」

「まあ、取り敢えず直すか」

なのはside

（この魔法を使えば無月君に話を聞いてもらえる・・・

まっってね！！）

決意を新たにしたなのはだった。

無月side

今は学校、と言っても俺は寝ている。

（・・・よし、早退しよう！！）

思い立ったが吉日という訳で荷物を整理していると・・・

「無月君！ちよっとお話があるの・・・」

「……何のようだ」

「この前……屋上でした約束のこと覚えてる？」

「……ああ、お前が魔法でも使って俺に一撃でもあえたらお話してやる

っていう内容だったな」

「約束は守ってね」

なのはは真っ直ぐに見つめてくる。

「ああ、約束は守る」

そして俺は帰ろうとしたのだが、

「って！無月君！なんで帰ろうとしているの！？」

「暇だし、眠いし、面倒だから」

「でも、帰っちゃだm「いいわよそんな奴」あ、アリサちゃん！？」

「別に帰りたければ帰らせればいいじゃない」

「ちょっとアリサちゃんs「お前の指図なんていらねえ俺は俺で勝手にする」

無月君まで何言っているの！」

そして無月は早々と教室から出ていった。

「無月君・・・」

なのは何か呟いていたが、無月の耳には届かない。

無月は帰宅途中にある公園のベンチで考え事をしていた。
それは、ジユエルシード集めをすぐに開始するか、
それとも、戦闘能力をあげる訓練をするか
という内容だった。

「ん？これは魔力反応か、月村とか言う奴の方から・・・
ジャミングコートを着れば戦ってもばれないだろ」
そして無月は目的地へ向かった。

なのはside

なのは達の前にはジユエルシードを持った黒い格好の
少女と使い魔らしき人物がいる。

「そ、そのジユエルシードを渡して！」

「これは、私たちに必要なもの・・・だから渡せない」

「それは危険な物なんだ渡してくれないか？」

「誰がアンタ達何かに渡すものか！！」

「なのは！俺も手伝うぜ！！」

私とユーノ君の前に見た目はカッコイイけど、
何か目がいやらしい男の子が出てきた。

「俺の名前は高町 秀哉だ同じ高町どうし仲良くしようぜ」

（ねえユ一ノ君）

（何？なのは）

（知り合い？）

（全く知らない）

「ちなみに俺様の魔力量のランクはSSSだぜ！凄いだろー！！」
「「「SSSS!？」」「」」

なんか凄いけど目線がいやらしくて
嫌な感じの男の子が現れた。

月無side

（さて・・・フェイトがなのはとの仲が良くなるまでは
ボンゴレギア（VG）で戦って、その後ハヤテが仲間になるまでは
刀で戦うか・・・）

「ん？アルフィンなんだあの高町の近くにいるSSSランクの魔導
士は」

「分かりません、先程突然現れました」

「チツイレギュラーか・・・あいつ、フェイトに攻撃していやがる
な」

「どうしますか？無月」

「もち」

無月はリングと毛系の手袋を装備した・・・

「さあ、初陣だ!!」
「はい!」

???

「くうっ!」

「フェイト!!」

（私の前に現れた目線が気味悪い男の子は正直
魔力の使い方は悪いけど、魔力が高くて一撃が強い!）

「フェイト大丈夫かい!？」

「うん、まだ行ける。バルディッシュ!」

そのとき私はあの男の子から目を離してしまい
気づけばあの子が撃ってきた魔法弾が私に当たるところだった

「フェイトー!!」

（やられる!!）
思ったそう。けど、どこも痛く無かった。
ゆっくり目を開けると・・・

「ッ！テメエーは誰だ!!」

「俺の名前？そうだな・・・ボンゴレとでも名乗っておこう」

無月side

（あつぶねえ・・・もう少ししてフェイトに当たるところだったじゃねえか）

「おい、テストロッサ怪我は無いかな？」

「え．．はい。怪我は無いです。助けてくれてありがとう」

「デメエ．．俺の邪魔をすんのか？」

「ああ俺にとつてはお前みたいな変態は手に取る程じゃないが、まだテストロッサには早いのでな」

「おいお前！フェイトがあんな餓鬼に負けるとでも言うのかよ!？」

「餓鬼？あいつはテストロッサと同じ年だよ」「消えろーーーーー」

「ー!!」「チッ」

あの変態がいきなり斬りかかってきやがった。

「まあいいか。行くぞ変態」

「デメエ．．殺す!!」

そして、変態（秀哉）VSボンゴレ（無月）の戦いが始まった。

無月はリミッターで魔法ランクEX Dまで落としている。

秀哉はリミッターは付けてないためSSS（付け方が分からない）。

変態登場！？（後書き）

無月「あの変態め・・・」

作者「あれ？お前もしかして、フェイトにほ」

「極限サンシャインカウンターー！！」

ふぎやあああー！！・・・」

無月「ではではさよならーの前に、

どうやらこの作者は課題やら仕事に追われるため
更新日時が遅くなります。では・・・」

無月・作者「良いお年を～～」

なのは・フェイト（私たちっていつになったらここに出れるのかな？）

無月VS秀哉(ボンゴレVS変態)(前書き)

作者「いやー前話ではいきなり斬りかかれて正直驚いたねー」

無月「別に・・・あいつ動き遅かったし」

作者「まあお前の設定がモロにチートだからなー」

無月「・・・(こいつが考えたんだよな)」

無月VS秀哉（ボンゴレVS変態）

無月side

「・・・おせえな」

（なんだこの変態。魔力が馬鹿デカイだけで戦術のパターンが少ない上に

直線的な攻撃に雑な剣術・・・舐めているのか？）

今はボンゴレ（無月）と変態（秀哉）が戦っていた。

（魔法弾と剣。少しは楽しめると思ったのだがな・・・）

「どうだああーこの俺様の力わよおおー！！！」

「黙れ変態。・・・そうだな、そろそろ飽きてきたしな・・・」

無月がそう言うのと、毛糸の手袋が光り輝き、赤が重視されたグローブに姿が変わった。

「おい、テメエ・・・なんだそのグローブ」

「俺の武器だよ。変態」

「チッ！！」

（相手の剣は・・・なぜに金色なんだ？）

そう、変態の剣は金色だった。

「死ねえええ　　！！」

「・・・「こいつ弱いな」」

なのはside

突然現れた黒いコートを着た少年。

魔力はあまり感じられないけど、すごく強い。

（凄い、魔力の差が物凄くあるのに、秀哉君を圧倒している！？）

「負けられない・・・私たちもはじめよう」

そして、私は私の戦うべき相手と向き合った。

無月side

「お前弱いな・・・（今の俺くらいまで魔力落としているんだけどな）」

「チツツツ！！！」

（なんなんだよこいつ！魔力は明らかに少ないのになんだよこの強さはよ！！）」

「向こうも終わったみたいだし、そろそろいいかな・・・」

「この俺が主人公！俺が最強なんだよ！！俺は負けないんだよ！！！」

「そうか・・・なら終わらせるぞ」

「ッ！！！！」

秀哉side

（見えなかった）

俺様は強い、この強さでなのはやフェイト、はやてといったかわいい子たちを

メロメロにして俺様の虜にするつもりだった。

(それなのになんなんだよこいつ、強い、強すぎる!!)

「この俺が主人公！俺が最強なんだよ!!」

「そうか・・・なら終わらせるぞ」

そうあいつが言い放ったとき、俺の目の前からあいつの姿は無かった。

「ッ!!!!」

そして、目の前が真っ暗になった・・・。

フェイトside

「・・・凄い」

(私のソニックフォームの最高速度を軽く越してる速度で、相手の後ろに回り込み、

的確に相手の意識を剥ぎ取っている!?)

「どうやら勝てたみたいだね」

「ふえ！あ、はい／＼／」

いつの間にかフェイトの隣にボンゴレが居た。

(驚いて変な声出しちゃったよ／＼／／)

「まあいいよ、それじゃ俺は帰るから。体に気をつけるよ」

「え・・・はい、ありがとう」

そう言っていると彼は少し微笑んで？消えた。

（一体なにものなんだろう？どうして助けてくれたのかな・・・？）

無月side

家に帰宅後・・・

「今日は大変だったなアルフィン」

「何言ってるんですか無月。私今回の戦闘でなにもしていませんよ」

アルフィンは少し拗ねてる。

「別に今日の相手は弱かったからね」

「そうですね、魔力だけ有っても効率良く使えないのであれば宝の持ち腐れですね。秀哉という人にピッタリです」

「・・・なあアルフィン」

「なんですか？」

「お前怒ってるだろ」

「・・・い、いえ」

（・・・今の空白の時間はなんなんだよ！？）

少し怒っているアルフィンでした。

「あ、そうだ！」

「どうしましたか無月？」

「おーい可愛くて、優しくて、美しくて、綺麗な神様出てきてくださーい」

「？出てくるわけな」呼んだー？」・・・ありましたね」

「実はさっしだけ能力を追加して欲しいんだけどいいかな？」

「いいよー。この可愛くて、優しくて、美しくて、綺麗な神様にお願いしてみなさい（エッヘンツ）」

「……………じゃあお願いなんだけどさ……………」

そして俺のチート能力が増えた。

「てか、意外と簡単に能力追加してくれたな」

「良かったですね無月」

「まあこれで俺が負けることなんてあまりないだろ」

「…………（まず、攻撃くらうのですか？）」

~~~~~結果~~~~~

無月VS秀哉……………勝者：無月

なのはVSフェイト……………勝者：フェイト

~~~~~

「そおいえば、アニメや漫画の能力フル活用できる時点で、別に頼まなくても

能力発動出来たんじゃね？」

「…………無月さん…………（今頃ですかぁ…………（疲））」

無月VS秀哉（ボンゴレVS変態）（後書き）

無月「弱かったなーあの変態」

作者「まあ能力無しの変態で、魔力バカを目指したからね」

無月「ふーん・・・何か酷いな」

作者「黙れ、このフラグメイカーめっ！！」

無月「・・・ルーン文字ハカノッ！！」

作者「あぢいいいいーーーーー！？」

ルーン文字ハカノッは松明Ⅱ炎を示します。

なのはと無月 はじめの出会い（前書き）

作者「なあ無月」

無月「なんだ」

作者「なんでさ、せつかくのユニゾンデバイスなのにアルフィン
人の状態にしないんだ？」

無月「分からないのか？どうせお前が俺とくつつけようとするから
だろ」

作者「・・・（やべえ、ばれてる（汗））」

なのはと無月 はじめの出会い

無月 side

「温泉？」

教室でいきなり話かけられたと思ったら
高町に「温泉に行こうと誘われた」。

「いや、俺はいい。それに俺はその日予定がある」

「え、そうなの・・・ごめんね忙しいのに」

「・・・・・・」

俺は未だに高町のことを理解できなかった。

いや、理解したくなかった、しなかったの方が正しいだろう。

（それに、温泉ってことはフェイト達と遭遇するわけ・・・か）

キンコンカーンコン

「本当は温泉に行った先でも会うのだから・・・」

俺の呟きは誰の耳にも届かなかった。

なのは side

~~~~今は御弁当タイム~~~~

「なのは！どうしてあんな奴を温泉に誘ったりなんてしたのよ!？」  
「アリサちゃん落ち着いて」



「落ち着いてなんかいられないわよ！私はいつが嫌いなの！！」

「私は嫌いじゃないんだけどな・・・」

「なのは無月君のどこがいいの？」

「・・・うん、ちよつとね。うち、私がまだちっちゃい頃にね、お父さんが仕事で

大怪我しちゃってしばらくベットから動けなかったことがあるの。

喫茶店も始めたばかりで今ほど人気がなかったから、お母さんとお兄ちゃんは

いつもずっと忙しくてお姉ちゃんはずっとお父さんの看病で、だから私割りと最近

まで家で一人にいること多かったの。そんな時に無月君と出あったの」

「ん？ちよつと待つて。あいつは最近になって転校してきたのよ。

なんでそんな奴と出会ったの？」

「うん、それはね・・・私がその頃、家に居ても一人だったから公園で遊んでいたの、

その時にね足をくじいて動けなくて、辺りも暗くなって、一人で泣いていたの。

そんな時に無月君と出会ったの」

「初めは怖かったけど、心配してくれて、優しくて、それだけで安心できて、

私はいつの間にか泣き止んで、笑っていたの」

「・・・」

「そして、泣いていた理由を聞かれて、答えたの」

「それで、あいつはなんて言ったの？」

「「一人で抱えこまなくていい。一人で悩まなくなってい。人は独りでは

生きてはいけないんだから。お父さんの怪我が治ったらいっぱい甘えなっ！」って

私はその言葉を聞いてまた泣いちゃったんだけどね。私が泣き止むまで傍に居てくれて

その後家まで送ってもらったの」

「ふーん。昔はあいつそんな奴だったんだ・・・今じゃ考えられないわね」

「でも、元はいい人なんだよ！きっとその後何かあったんだよ・・・

」

「そっか・・・」

だから、私はあの約束を受け入れて、「「お話」」をさせてもらっただから!!!

無月side

「くしゅん！」

「無月かぜでもひいたのですか？」

「いや、そんなわけないのだが・・・」

（なんて言うか嫌な予感がしたというか、寒気がしたというか・・・）

なんだかねで意思疎通？ができている二人であった。

「そっか・・・もうすぐで温泉イベントがあるのか・・・」

「いきたいのですかマスター？」

「マスターは止せて・・・いや、その温泉に行った先でテストロツサと高町

がエンカウントすんだが、多分あの変態野郎も出てくると思うし、もう少しV.Gの扱い方を正確にしておこうかな」

「ふふっ・・・まあマスターならなんとかかりますよ。っということとは

マスターも温泉に行くのですか？」

「・・・アルフィン・・・そこまで名前で呼ぶの嫌だったのか・・・。  
温泉にいくと言っても、あいつらと遭遇するようなへまはしない。  
それに変態と戦えば、今の高町やテストロッサでは勝つのは難しい」

「だからマスターが戦う・・・と。」

「・・・（もう、突っ込まん）」

「いいのではないですか？」

「え？」

「それがマスターのやりたいことならいいのではないのでしょうか」

「・・・ありがとなアルフィン」

「いいえ」

（それにしても、あの変態と戦ったとき、グローブのVerをXではなくVに

しておけば奥の手に出来たんだがな・・・少し失敗したな）

「まあいい。戦いの時まで俺は武器の使用チェック等をする」

「かしこまりましたボス」

「・・・もう好きに呼んでくれ（涙）」

「では、ダーリン「それは無理だ」ええー・・・」

「名前かマスターにしてくれ・・・」

「ではご主人様で」

「話を聞けーーーー！！！」

なのはと無月 はじめの出会い（後書き）

作者「・・・何かアレだな」

無月「ん、なんだ？」

作者「お前の予定の性格がずれてきているなあって」

無月「・・・（ブチッ！）頭・・・冷やそうか」

作者「・・・（；；）」

## 無月の怒り（前書き）

作者「……………」

無月「どうした？今日はやけに静かだな」

作者「いや、次のバトルでどんな装備を使わせるか迷っていてな」

無月「！お前がそんなまともなことを考えていたとは！！」

作者「……………バカにしてる？」



「ママー変な人が居るよ」

「こら、見てはいけません!」

(はぁ~~~~愛しの人達の・・・ふふふ・・・)

変態は、どこに行っても、変態だった。

なのは・フェイトside

(何か今ものすごい~~~~く悪寒が走ったんだけど・・・)

二人の脳裏に高町 秀哉の顔が浮かぶ

(結界張っておこう)

無月side

旅館の近くの林の一角

(そろそろか)

無月が目を覚ました頃には辺は暗くなり、  
ロストログアの反応と魔力の反応があった。

「アルフィン準備はいいか？」

「はい、いつでも」

「行くぞ!」

そして、無月の手袋の形が変わった・・・

フエイトside

「うつ・・・」

「フエイト!？」

最初は誰も居なくて順調にことを運んでいたのに、

また、この前と同じ嫌な目線のこと、白いアジャケットの女の子、その子の使い魔らしいフェレットが現れ、ジュエルシードの封印を邪魔されてしまった。

「なあフエイトちゃん」

嫌な目線の男の子が話かけてきた

「君が僕の物になれば、ジュエルシードをあげるよ」

「!？」

何・・・言っているの、あの人は・・・目線が・・・怖い!!

「フエイト!そんな奴の言葉なんか聞くな!!」

「黙れよ犬風情が」

男の子がそう言い放つとアルフの周りに魔法弾が・・・

「消えな」

「アルフ!!」

アルフが危ない!!そんなとき・・・

「さっきから黙って聞いていれば・・・お前ごとき雑魚が



調子に乗ってんじゃねえぞ・・・」  
「え？」

その瞬間。嫌な目線を送っていた男の子が地面に叩きつけられていた。

「がはっ!!」

無月side

(・・・この変態は・・・本当は斬りたいが、斬撃は闇の書のとくに使うから・・・今回は大地の力で地べたに這い蹲らせてやるよ)

「フェイト・アルフ大丈夫か？」

「!あんたはボンゴレ!? 助けに来てくれたのかい!？」

「ああ本当はもう少し早く来たかったんだが・・・ちよつとな」

寝ぼけて遠回りしてしまったとは言えまい。

「テメエ・・・ボンゴレ・・・俺様の邪魔を・・・」

「フェイト」

「は、はい!」

「あんな奴の言うことをまにつけるな」

「え？」

「まあいい・・・お前は向こうの白い奴女子と戦ってこい」

「う、うん。行ってくる」

「ふっ・・・頑張ってこい」

(ミスったー!。フェイトって呼んじまった・・・。まあいいか、

あいつも別に気にしてないだろ。それはともかく・・・)

「さて・・・ここから先は一方通行だ。  
俺を倒してみな」

・・・俺ってアクセラレータになれるんじゃない？

フエイトside

(どうしてあの黒い服を着た男の子は私たちを守ってくれるのかな？)

「ねえ、アルフ？」

「さっきの黒服の男の子のことかい？」

「うん」

「あたしは信じるのはまだ早いと思う・・・けど」

「けど？」

「あのさっきの変態と今のプレシアよりはマシだと思うよ」

「うん・・・そう・・・だね」

お母さん・・・

「フエイト・・・私たちも戦うよ！」

「うん！」

なのはside

(やっぱり・・・私を感じていたあの嫌な視線は当たっていたんだ。  
私が・・・もし、襲われたら・・・あの黒服の男の子は  
助けて・・・くれるのかな)

「何考えてるんだろ・・・私」

「なのは、くるよ!」

「うん、わかってる。私達も戦うよユーノ君!」

強くなる!そして・・・

「フェイトちゃんや無月君とお友達になるんだから!!!」

## 無月の怒り（後書き）

無月「なあ・・・」

作者「ん？なんだいワトソン君」

無月「（あえてスルー）これさ、明らかに

フェイトのフラグ立てる気だよな・・・お前」

作者「ナンノコトカナ？」

無月「・・・ポイズンクッキング どうぞ、召し上がれ」

作者「え・・・ちよつ、おま・・・ガハッ」

バタッ！

作者は星々の仲間入りを果たしたのであった。

戦闘開始！～能力テスト～（前書き）

無月「さあーで、今日は能力テストも兼ね備えて、ちと暴れるぜ！  
」

作者「まあ・・・ほどほどに・・・なっ」

無月「~~~~~」

作者「（怖くて口出し出来ねええー）（；・）（）」

## 戦闘開始！～能力テスト～

無月side

「さあーで、最初から上げていくけどいいよな？  
まあ断られても上げるがな」

「はあはあはあ・・・」

無月は戦闘開始とともに大空のVGと大地のシモンリングを発動し、  
圧倒的な機動力で

秀哉を翻弄し、大地の重力で相手の機動力を大幅に削りとっていた。

「はあはあ・・・テメエ・・・なんだその力は」

「お前程度に教える義理はねえぞ雑魚が・・・」

「テメエ・・・調子に乗ってんじゃねえぞおおおー！！！！！！」

（遅いって弱い・・・そして脆い）

秀哉が突っ込んでくるが、大地の重力で地面に叩きつける。

「ガハッ！」

（はあ・・・そろそろかな）

「大空のVG・大地のシモンリング解除」

無月がそう呟くと、無月の手や太もも当たりを纏っていた防具と、  
額に灯っていた炎と秀哉を抑えていた重力が消えた。

（次はこれだな・・・）

「来い。瓜、開匣」

ボックスの穴に指輪から出ていた真つ赤な炎を注入した。

「ニヤウーン！」

「なっ！？」

カンビオ・フォルマ  
「形態変化」

「ニヤアアア！！」

瓜と呼ばれた猫は「カンビオ・フォルマ」と聞くと、  
無月の左腕の武器の一部となった。

それは、荒々しく吹きあれる疾風と謳われた・・・

ジーのアーチエリー  
「Gの弓矢」

秀哉 side

おいおい、こいつはどういうことだ！？

いきなり猫が現れたとおもいきやあいつの武器になりやがったぞ！？

「おい・・・何をしやがった・・・」

「お前に教える義理はないと言ったる？」

そして・・・これで吹き飛べ・・・」

あいつは、弦を引っ張り、溜めると・・・

トルネード・フレイムアロー  
「赤竜巻の矢！！」

バカデカイ一撃が俺に向かって放たれた。

溜めが少し長かったため、俺はなんとかギリギリで回避に成功する

ことができた。

「ふつ。今の技は少しばかり溜めるのに時間がかかるんだね」

「そうだな。だったらどうした！

果てる！ガトリングアロー！！」

数発の矢が俺に向かって放たれたが、

「ふつ。防御！！」

このぐらいの威力なら、俺のデカイ魔力を守りに回せば防げる。  
ニヤリ。つい、笑ってしまった。

「ああーわり、今のお前の顔見たらちとイラ付いたわ・・・

ねえ、変態・・・」

「ああ。な」

「噛み殺すよ・・・」

俺が言い終わる前に言葉を遮られ、  
その瞬間あいつから、物凄い殺気が俺に向かって放たれた。

無月side

（やべー・・・ちと殺気出しすぎちゃったか？

まあいいや。あの変態のおかげでこっちは能力のテストが出来る  
んだからな）

「お前・・・死ぬなよ」

「・・・・・・は？」



俺はさつきとは色の違うボックスを出した。  
そして違う色の炎をまた注入した。

「おいでロール、開匣」

ボックスから出てきたのはハリネズミだった。

「クピ」

「ロール、カンビオ・フォルマ」

「クピーーーー!!」

「追加だ、シモンリング氷河・森!!」

そして俺は、鋭い葉と氷の葉を纏った。

「さあ始めようか。ワンサイドゲーム（一方的な虐殺）を・・・  
（まあ殺しはしないけどな）」

秀哉 side

なんなんだこいつ、最初はグローブ、次は弓、そして次は・・・

「なんだそれは・・・トンファーと防具と・・・お前が纏っているのはなんだ？」

「はあああー・・・お前さ・・・3度目だぜ」

お前に教える義理は無い」

そこからは凄かった。あいつは動いてもいないのに

俺の体は「何か」によって体中を切り裂かれる。

「ぐわああ!!・・・ぜえぜえぜえ・・・なんなんだよこいつ!・・・」

(攻撃が・・・見えねえ・・・)

「ふむ。遠距離は大丈夫だな。てか、マジ切れ味スゲー。・・・次はこれだ」

あいつはそう言い、トンファーを構える。  
その瞬間・・・

「消えた!?!」

「遅いよ君。・・・遅すぎる」

あいつは俺の懷に潜り込んでいた。  
そして物凄い速さで俺に攻撃を打ち込む。

「ガハッ!?!」

(こいつには・・・まだ・・・勝てねえ  
俺の・・・ハール・・・ム)

そして、意識が途切れた・・・。

無月side

(チッ!もう気絶したのかよ。かなり手加減したんだけどな・・・。  
まあある程度データもとれたし、次はヴァリアーリングを試すか・  
・)

「ん、向こうも終わったみたいだな」

「そのようです。マスター」

ふと、なのはとフェイトの方に目をやると  
フェイトとアルフが遠くに飛行していた。

「俺も変えるか。その言えば、孫悟空みたいに瞬間移動できるのか  
な？」

「試してみてはいかがですか？」

「あ、いや第8の属性の炎を使ってみる」

「第8の属性の炎？」

アルフィンに尋ねられたが、見せた方が早いと判断に、  
手を前に出し、

「開け」

そう呟くと、空間に穴が空いた。いや、炎によって作られた。

「行くか」

この場から立ち去ろうとしたとき

「あ、あのー！」

声をかけられた……………はあ

戦闘開始！～能力テスト～（後書き）

無月「……………（イライラ）」

作者「（ああ。相手が余りにも早めにのびちまったから  
怒っているなありや……………」

無月「はあ……………やりたりねえなあ……………」

作者「やっぱりかああ————！！！！！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9474z/>

---

魔法少女リリカルなのは～孤高の黒き剣士～

2011年12月31日16時59分発行